

ここで問題なのは、武家の古都といいながら武家の拠点となっていた御所については全く触れていない。宇津宮御所に至っては調査すら全く不可能な状態である。また都市の遺跡として考える上で、大きな問題は発掘保存の体制が全く出来ていない。鎌倉は地下に大変貴重な遺構があり、それが鎌倉の都市としての真実性とか完全性を物語るはずだが、どこにも残っていない、見えない。

本来ならば「武家の古都・鎌倉」を登録する、ということになるのだが、推薦書原案作成の段階では武家の古都鎌倉に有る文化財を軸に、「武家の古都・鎌倉の文化財」とすることで落ち着いた。

これを契機に行政・市民・研究者が一丸となって運動の輪を広げ、新しい鎌倉の魅力を引き出して欲しい。

【要旨】 上野邦一さん

◎ イコモスの立場から考える

世界遺産になるのは、歴史的な意義と価値、同時にその対象となる物、場所の保存管理をきちんとし、どう受け継いでいくかを明示しなければならないということ、念頭におく必要がある。そこで「武家の古都・鎌倉」というならば、鎌倉

幕府の拠点である幕府跡はどうなっているのか、

どうするのかを多分専門家からは当然問われるであろう。保存管理計画の中でしかるべき項目が入っていないければ、その理由だけで返される。

最近ユネスコでは、「リビングヘ



リテイジ」ということを言っている。端的にいうと「生きている遺産」ということになる。つまり、遺跡は遺跡として隔離されて残ってきたのではなく、長い間その地域の住民と一体となって残ってきた。であるから、そこに暮らす人たちの生活を脅かすような形での保存は好ましくない、という考え方。そういう意味では、鎌倉の場合、今までのものと市民の生活とをどう調和させていくのかを提起していけば、世界遺産をこれから活用していく先駆けになるのでは。ぜひ「生きている都市」、その中で遺産をどう守っていくのかを考えてほしい。

民はまだ目の色が変わっていないのか。身近過ぎて価値や意味がわからないということもある。やぐらだって鎌倉の人にはどうってことがないかも知れないが、私が見ると面白い。発見だつてある。ぜひ目の色を変えて欲しい。

——協議会が出来て少し目の色が変わってきたのでは。その協議会で登録資産候補 24 箇所のマップを作ったが、大倉幕府跡もやぐらも載っていない。「武家の古都・鎌倉」としては幕府跡は省くわけにはいかない。やぐらも鎌倉らしい都市の在りようとして特徴を示すものだという。市民はどう受け止めたらいいか。



—— 今一番心配しているのは御所(幕府)の遺構である。大倉は

手付かず、若宮大路周辺の遺構や遺物は地権者との問題があり、全く残っていない状況である。今ならまだ可能だと思うので、発掘調査をして遺構を明らかにすべである。

上野 世界遺産になるためには、世界の人々の見方を獲得しないとイケない。鎌倉もその意味では、防御都市、城塞都市ではなく「武家の古都」にしたことは多分正解だと思う。幕府跡ややぐらはきちんとプレゼンできるようにすることが大事だ。

行政 1 世界遺産の運動を契機に、条件整備を重ね鎌倉を魅力ある街にしていく、そのためには世界遺産登録に向けての取り組みは意義深いものと考えます。

行政 2 われわれ行政は、市民運動の中で直接反映されてくる声と、声にならない声の両方を受け止めて進めることの重要性を実感している。歴史的資産の保全と併せて、市民生活の在りようをしっかり位置づけていきたい。